大学等名 学習院女子大学

令和６年度　自己点検・評価について

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	「データサイエンス教育プログラム」は、令和５年度から全学生に対して開始しているが、令和６年度の実績で履修率74.6％を達成している（大学全体の収容定員の学生が、データサイエンス教育プログラムの授業を１科目以上履修している）。また、前年までに実施していた同様の科目の履修人数と比較して、最大で176.6％増加している。 本プログラムは、卒業までに修了条件を満たした学生に対して、修了証を発行する仕組みとなっているため、必修及び選択科目を１科目でも履修している学生数を「履修者数」とみなすと、順調に履修を進めている状況と判断できる。また、令和４年度以前に入学した学生に対しては、本プログラムの内６科目について、前年までの同様のシラバス内容の授業履修の読み替えを承認している。 令和５年度と令和６年度の修了要件を満たした学生数は、計24名である。
学修成果	令和６年度のデータサイエンス教育プログラムの学生履修者への授業アンケートの結果を分析すると、必須科目の「情報リテラシー」の平均満足度が81.5％、本プログラムの春学期の全科目の平均満足度が81.3％となっている。特に、このデータサイエンス教育プログラムのために令和５年度に新設した必須科目の「データサイエンス・ＡＩ基礎」の授業の満足度が、87.1％と高い満足度をあげている。 また、同アンケートの結果によると、「この科目分野をさらに深く学びたくなりましたか？」という設問に対して、全科目の平均で、81.6％となっており、さらにデータサイエンス・ＡＩを学びたいという意欲をもっている。「この授業で新しい知識やものの考え方を得ることができましたか？」という設問に対しては、全科目の平均で、91.3％で、新しい知識を得ることができたという学修成果があげられている。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	令和６年度の授業アンケートの結果を分析すると、良好な学修効果が得られている。 特に、「データサイエンス・ＡＩ基礎」の授業においては、「この科目分野をさらに深く学びたくなりましたか?」という質問に対して、94.6％がさらに学びたいと回答している。履修した学生からは、「データサイエンスを学ぶことで、調査の目的に応じた観点でデータを観察することや、データの全体を俯瞰し、傾向を把握し、データの分類と分析を行い、次の施策を考えることが重要であり、創造力を用いて有用にデータを活用するよう実践していこうと考えるようになりました」などといった感想があげられ、前向きなデータサイエンス・ＡＩの必要性の理解が得られている。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	令和６年度の授業アンケートの結果を分析すると、良好な後輩等への推奨効果が得られている。 学生からは、「進化し続けるＡＩに追いつくために、非常に学びのある講義でした。使い方を理解して、新たなものを作り出すという本来の目的を念頭に置き、ＡＩの利用に適応していきたいと思います。新たな考え、見方を発見できる授業で、とても楽しかったです」「授業はただ学びを得られるだけでなく実践的な内容も多々あって、とてもこの授業を受けてよかったと思いました。他の学生の発表もテーマが普段関わりのない視点からの物が多かったので興味深く参考になりました。また、後輩にも、この履修を薦めたいと思っています」などといった感想があげられている。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本学の「データサイエンス教育プログラム」が、文部科学省の「ＭＤＡＳＨリテラシーレベル」の認定を受けたことを、学内への周知はもちろんであるが、学外にも周知を拡げている。特に、「データサイエンス・ＡＩが、今後の学生生活だけなく、将来の社会での活動において、いかに重要な学びであるか」を、学生に理解していただくよう、担当教員と履修した学生のメッセージを、大学公式サイトで伝えるように取り組んでいる。また、全学年の履修ガイダンス時のオンデマンド映像による周知を実施し、本プログラム関連のイベントについても、ポスター、パンフレット等による周知を継続的に行っている。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和６年度に本プログラムを修了した４年生の進路は、「大手ＩＣＴ関連企業」「メディア・印刷関連企業」「教育関連企業」「メーカー関連企業」「大学院」等となっている。また、令和５年度に修了した４年生の進路は、「大手ＩＣＴ企業」「法律事務所」「中学校教員」「大学院」等である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	令和６年度には、特別授業として、メディア企業や広告会社とのコラボレーションにより、ＡＩとメディアの未来を展望する「未来メディアトークショウ」を実施した。その企業からは、データサイエンス・ＡＩの基礎的知識を学ぶこととともに、そのデータ分析から、新しい価値をつくる人材を育ててほしいとの要望があった。また、数年先のデータサイエンス・ＡＩによる社会への影響について、多角度からの視点や示唆があり、データサイエンス・ＡＩのスキルを活用し、社会に新しい価値をつくる学びに応じるために、本学では、産学官連携によるＰＢＬのプロジェクト等を実施していく。
数理・データサイエンス・ＡＩを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	データサイエンス・ＡＩが身近なところですでに活用されている事例の調査を授業の課題とすることで、データサイエンス・ＡＩを学ぶことの楽しさを知るきっかけをつくりだしている。また、データサイエンス・ＡＩがビジネスモデルの創出をはじめとした社会への影響を考えるために、本学の環境教育センターと連携し、「ＳＤＧｓコミュニケーション企画プロジェクト」を立ち上げ、ＰＢＬとして、福島県南会津町と株式会社電通アドギアとの「産学官連携プロジェクト」を実施した。特に、自治体の実態データ分析に基づき、学生が地方創生課題解決企画・商品企画・情報発信（ＳＮＳ）企画・エコロジー企画・ツアー企画等を考え、その成果を発表する「企画コンテスト」も実施した。このＰＢＬ型のプロジェクトにより、より実践的な学びの機会をつくり、さらに来年度以降も、ＰＢＬ型の授業を継続をして実施していく。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	担当教員が異なっても授業水準が維持できるよう、主要科目においては、教材とツールの標準化を進めていく。特に、生成ＡＩを利活用した演習などは、今後、さらなる進化が考えられるため、基礎的知識については標準化を図り、同時に、応用的スキルについては、ハンズオン教材を体系的にライブラリー化して、学生が柔軟に選択し利活用できる環境も整備していく。